

発行所

札幌市北区北15条西7丁目
北大医学部同窓会
TEL&FAX (011) 706-5007
E-mail: furate@med.hokudai.ac.jp
https://hokudai-med-dousou.com

編集人 矢部 一郎
発行人 浅香 正博

北大医学部同窓会新聞



CONTENTS

- (1)・医学部保健学科長就任のご挨拶と
医学部保健学科の現況 ……………石津 明洋
- (2)・計報 名誉教授
廣重 力先生(31期)を偲んで ……大場 雄介
・春の褒章、叙勲
笹本 洋一 小熊 豊 北野 明宣
- (3)・新世紀の医学に向けて(52) ……工藤 與亮
・ズームアップ③ ……………加藤 達哉
- (4)・銀 ……………島本 則光
・紡がれ続ける『フラテ』の歩み ……大崎麻里菜
・フラテ111号発行のお知らせ
- (5)・告知板
・北海道医学会からお知らせ
・ドクター総合補償制度のご案内
- (6)・新刊書紹介
・会員名簿・同窓会誌の処分にお困りの方へ
・同窓会費納入のお願い
・百年記念館の利用について
・ご逝去者
・一面の写真説明
・編集後記



プラタナスの木漏れ日

えび な やす ひこ
蝦名 康彦(66期)



医学部保健学科長就任のご挨拶と医学部保健学科の現況

いし づ あき ひろ
医学部保健学科長 石津 明洋(66期)

この度、令和7年4月1日付で医学部保健学科長を拝命いたしました。7代目の学科長であり、医学部同窓会員としては、初代(平成15～18年度)松野一彦先生(48期)、2代(平成19～23年度)小林清一先生(50期)に続く就任となります。

私は平成2年卒で、卒業当初は腎臓内科医を志しました。腎生検の標本の見方を市立札幌病院病理部に教わりに行っていたこともあり、学位研究は病理学講座で行わせていただきました。テーマは血管内皮細胞の生物学でした。血管内皮細胞は、今では市販品を購入可能ですが、当時は初代培養するしかなく、夕方になると近隣の病院に電話をかけてその日お産があったか聞き、あった場合には臍帯を譲り受けに行って、臍帯静脈から内皮細胞を単離培養していました。習得した培養技術を応用して、ラット下大静脈からも内皮細胞を単離培養できるようになり、それを使った研究で博士号を取得しました。大学院修了後は内科に戻ることも考えましたが、ちょうどそのタイミングで血管炎を自然発症する遺伝子改変ラットが教室で樹立されたこともあり、病理学講座にとどまって、その病態解析に取り組みました。以降、血管炎研究

が私のライフワークとなっています。この間に病理解剖と病理診断についても学び、死体解剖医資格と病理専門医を取得しました。

平成16年に医学部に保健学科が設置された翌年に保健学科に異動し、臨床検査技師をはじめとする医療専門職者育成に携わることとなりました。平成20年には大学院保健科学院が開設、保健科学研究院が新たに設置されたことに伴い大学院教授となり、現在に至ります。保健科学研究院では、血管炎の病態形成における好中球の役割に着目した研究を展開しています。

現在の医学部保健学科における医療専門職者育成は、看護学専攻・放射線技術科学専攻・検査技術科学専攻・理学療法学専攻・作業療法学専攻の5つの専攻で4年制教育が実施され、卒業生には専攻ごとに看護師・診療放射線技師・臨床検査技師・理学療法士・作業療法士の国家試験受験資格が与えられます。また、保健師・助産師・専門看護師の育成は修士課程に設置した各コースで実施し、所定の単位を取得した修了生に各受験資格が授与されます。

医療専門職者の育成における近年の変容の一つに、医師の働き方改革に関

連したタスクシフト/シェアへの対応を求められていることがあります。医療専門職者側からの視点に立つと、従事できる業務が拡大することは医療現場におけるプレゼンス向上につながりますので歓迎すべきことである一方、当然ながら責任を全うするために知識と技能の習得に努める必要が発生します。これに対応するため、各専攻でカリキュラム改正を行い、新時代のも職種連携を担う一員として医療現場に送り出せるよう、講義・実習等の再編に取り組んでいます。

医学部保健学科は、その前身も含めて、これまでに幾多の卒業生を医療現場に輩出してきましたが、大学院大学として本学が果たすべき使命や変化する社会の要請に応じて、卒業生の進路にも変化が生じてきています。大学院進学希望者が卒業生の2/5を占め、その一部は教育・研究者を目指すようになりました。実際、本学科の専任教員74名のうち、20名が本学科の卒業生、前身の医療技術短期大学の卒業生も含めると34名が母校に戻り、後進の育成を担っています(令和7年5月1日現在)。また、企業(医療に関連する企業が中心ですが、そうでない企業も含めて)

への就職者も一定数認められるようになりました。保健学科での修養は、多様な分野への適応性を有していますので、卒業生の進路が広がっていくことは喜ばしいことと感じています。

自身のこれまでを振り返り、改めてヘルスサイエンスを楽しむ環境に身をおけたことを幸せに思います。生命に関わる研究をしているのに、「楽しむ」というと不謹慎かもしれませんが、常に医療現場での問題点を見据えながら、仮説を検証し、ディスカッションを重ねて新知見を得る過程は、仮説の間違いに気づいて道を引き返すことも少なくはないものの、私には「楽しく」感じられます。そして、楽しいからこそ没頭でき、これまでに気づかれていなかったことに気づくこともできるのではないかと思います。大学院保健科学研究院・大学院保健科学院・医学部保健学科における研究・教育が、ヘルスサイエンスの楽しさを享受できる環境で行われ、そこからの発信やそこを巣立った人材が医療現場に双方向性の良い還流をもたらすことができるよう、微力を尽くす所存です。同窓会諸先生方のご支援を賜りましたら幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。



訃報 名誉教授 廣重 力先生(31期)を偲んで

細胞生理学教室 教授 おお ば 大場 ゆう すけ 雄介(72期)

北海道大学名誉教授 廣重 力先生が、令和7年(2025年)5月22日、94歳でご逝去されました。ここに先生のご遺徳を偲び、深い敬意と感謝を込めて謹んで哀悼の意を表します。

廣重先生は1955年に本学医学部をご卒業後、大学院博士課程修了、米国イェール大学での研鑽を経て1967年に助教授、1975年に教授に就任されました。神経内分泌学と生体リズム研究の先駆者として、CRHの活性測定法の確立や概日リズム制御機構の解明など、国内外に大きな足跡を残されました。

その業績は英文原著・総説・著書を含わせて100編を超え、時代を越えて多くの研究者に指針を示しています。北海道医師会賞、北海道知事賞を受賞され、2007年には瑞宝重光章を授与されました。平成26年度には北海道大学医学研究科・医学部「特別賞」も贈られ、研究と教育、大学改革への尽力が改めて称えられました。

先生は教育者としても卓越され、多くの優れた人材を育てました。生理学第一講座からは先生の薫陶を受けた教授が多数巣立ち、その系譜と理念は今

も息づいています。私自身、学部2年のときに先生の講義に触れ、その論理の明晰さと温かな人柄に強く惹かれました。私が教授として歩み始めた後も、地方会総会にお越しくださり、現役さんながらの深いご質問を頂戴した衝撃と尊敬は忘れられません。後進にも厳しくも温かい助言を惜しまず、学問を愛される姿は多くの教室員の励みでした。

先生は管理運営でも優れた手腕を発揮され、医学部長としてカリキュラム改革、脳死判定基準の提案、さらに1991年からの4年間は北海道大学総長として、学部一貫教育体制や副学長制度の導入など大学の礎を築かれました。大学入試センター所長、北海道医療大学長、学校法人理事長としても高等教育の発展に尽力されました。学会活動では日本生理学会常任幹事、日本神経

科学学会理事、国際神経内分泌学会誌や『Jpn. J. Physiology』の編集委員長を務め、研究界全体を支えられました。

誠実で柔和なご人柄の奥に、問い続ける探究心と、人を育てる情熱がありました。先生の問いかけの一つ一つが、今も私たちの学びの礎です。ここに廣重力先生のご功績とお人柄を偲び、心からの感謝を込めてご冥福をお祈り申し上げます。

故 廣重 力先生を偲ぶ会開催予定

日時：令和7年10月26日(日)16時より

式場：北海道大学医学部百年記念館

主催：北海道大学医学部生理学
第一講座同門会

問い合わせ先:細胞生理学教室
(TEL:011-706-5158)

春の褒章、叙勲

藍綬褒章受章



日本医師会
常任理事

ささ もと 笹本 よう いち 洋一
(60期)

「藍綬褒章の叙勲受章に際して」

このたび、令和7年春の褒章に際し、思いがけず藍綬褒章を拝受いたしましたことをご報告申し上げますとともに、日頃よりお力添えを賜っております皆様へ心より御礼申し上げます。

去る令和7年5月12日、ホテルニューオータニ東京の「芙蓉の間」におきま

して、厚生労働大臣（代理 鰐淵洋子厚生労働副大臣）より褒章の記と褒章の伝達を受け、その後、夫婦で皇居へ参内し、「春秋の間」にて天皇陛下に拝謁の栄誉を賜りました。

この栄誉もひとえに、皆様方の温かいご指導とご支援の賜物と、深く感謝申し上げます次第です。

藍綬褒章は、各種団体の活動を通じて社会福祉の増進に貢献された方々や、国・地方公共団体より委嘱を受けた公共事務（保護司、民生・児童委員、調停委員等）に尽力された方々に授与されるものとされております。私は、保健衛生関係団体の役職において、その発展に寄与した功績により授章の運びとなりました。

昭和59年に北海道大学医学部を卒業後、臨床研修制度が存在しなかった時代背景のもと、直接北海道大学眼科学教室に入局いたしました。平成13年に麻生の地にて開業するまでの17年間、大学にお世話になりました。

平成15年より札幌市医師会の健康教育活動委員会委員を拝命し、平成21年から札幌市医師会理事、平成25年より北海道医師会常任理事、令和2年より北海道眼科医会長、令和5年より日本医師会常任理事として医師会活動に携わってまいりました。日本医師会においては、感染症危機管理対策・予防接種、会員情報、医学図書館、組織強化等を担当し、「日本医師会新会員情報システム(MAMIS)」を新たに構築いたしました。

また、中央における公職として、内閣官房内閣感染症危機管理統括庁「新型インフルエンザ等対策推進会議」、厚生労働省「医道審議会（医師分科会）」、厚生科学審議会「予防接種・ワクチン分科会」「結核部会」「感染症部会」などの構成員を務め、各審議を通じて、微力ながら国の医療の向上に寄与させていただきました。

この褒章は、今後も国民の生命と健康を守り、安全で安心な医療をお届けするために最大限努力するようにとの皆様からのご叱咤激励の証と受け止めております。

これからも皆様のご指導ご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

旭日中綬章受章



公益社団法人
全国自治体病院協議会 名誉会長
砂川市立病院 名誉院長

お ぐま 小熊 ゆたか 豊
(51期)

「旭日中綬章を受章して」

北大医51期の小熊と申します。本年春の叙勲で旭日中綬章を賜り、同窓の皆様にご挨拶するようご指示頂きました。

私は学生時代はスキ一部に所属し、卒業後は第1内科に入局、村尾 誠教授、川上義和教授のご薫陶を受けました。卒業後半年で砂川市立病院で研修を開

始し、それ以来、恩師の31期 南須原 浩一院長に長年ご指導をいただき、今日に至りました。

大学では血液凝固線溶学を31期 長谷川 淳先生から手ほどきを受け、忙しく楽しく過ごさせていただきました。娘の起きている顔を久しぶりに見て、「叔父ちゃん、また来てね」と言われたりしたこともありました。

その後H3年に砂川市立病院に戻り、H8年から26年まで院長、その後事業管理者として4年勤務しました。この間H17年から30年まで全国自治体病院協議会（全自病協）の北海道支部長、本部常務理事、副会長を務め、H30年から会長として6年勤務しましたが、体調を崩し昨年退職しました。H25年から一時、北

海道医師会（道医）副会長も務めました。

全自病協では遑見 公雄会長始め多くの方々にご指導いただき、正会員841、準会員242の施設の仲間にご支援いただきました。道医では40期 長瀬 清会長以下多数の方々とは様々な課題を検討させていただき、充実した時を過ごさせていただきました。

私自身は、医療の質や専門性を高め機能分担、連携を進めること、医師の適切な養成、研修制度を確立し、偏在を解消して、地域医療における自治体病院の役割を高めることに努力して参りました。国会議員連盟の先生方、厚労省、総務省、文科省の関係省庁の方々、全国知事会、市長会、町村会の開設者の方々、様々な病院団体、医療関係者

の方々、委員会や協議会、要望活動などを通じて、医療体制の在り方や対応策等を検討してきましたが、思うに任せないことばかりでした。最近では病院の経営状況が悪化し、少子高齢化、人口減の進展と共に医療崩壊の恐れが迫っていることを危惧しています。

一方最も嬉しかったことは、コロナ発症当初に感染対策に苦慮しながら、自治体病院が率先して治療に当たり、国民の皆様から自治体病院の存在意義をご評価頂いたことです。

我国の医療は様々な課題を抱えていますが、安全・安心、効果的医療体制が進むことを願っています。同窓の皆様様の益々のご活躍を祈念してご挨拶とさせていただきます。

旭日双光章受章



元北海道医師会
常任理事

きた の 北野 あき のぶ 明宣
(44期)

「叙勲の栄誉に浴して」

この度保健医療の分野において旭日

双光章を受賞し皇居宮殿豊明殿において天皇陛下に拝謁する機会を得たことは大変な名誉と思います。医師を目指す時からこのような光栄な叙勲の栄誉に浴することなど、考えも及ばぬところでした。叙勲は社会の様々な分野における功績の内容に着目し、顕著な功績をあげたものを表彰する場合に授与されるものとなっており、道民のために社会福祉の仕事をしてきたことが評価されたものと有難く受け止め

ています。

戦争の足音がひたひたと迫っている中、真珠湾攻撃、第2次世界大戦が始まる前に生まれ、ジフテリアに罹患し逼迫した医療情勢の中瀕死の状態にある我が子を思い、医者にこの子の命だけは助けてほしいと懇願した母親の熱意により何とか一命をとりとめることが出来たのが小生である。助かった命だから社会に貢献しなさいという願いから両親の医者にさせるという強い思い

のもと育てられ、教育費負担の少ない国立大学を卒業し医師への道がスタートした。しかし世の中スムーズにいかず大学卒業後は学園紛争の最中で、今と言う医療勤務環境改善、卒後教育改善を目指すインターン闘争による全国医師国家試験ボイコットがあり1年遅れの医師免許証取得となった。その後病理、外科、精神科に在局し、紆余曲折があったものの現在の場所に落ち着いた。当時の小樽市医師会高橋昭三会長

の強い指示により北海道医師会理事業務に携わることになり、同時に小樽市医師会、北海道精神科病院協会、北海道病院協会、日本医師会などの仕事に

も従事し、健康に恵まれ恙なく仕事をやり遂げることが出来ました。自分1人の力だけでは出来ず、しっかりした銃後の守り、関係職員の皆様、上記以外

にも北海道庁職員の方々や関係団体職員の協力及び木下病院職員の方々の協力と支えが無ければ成し遂げられなかったことです。ここに皆様に厚く感

謝し御礼を申し上げます。



新世紀の医学に向けて (52)

北海道大学における医療AI教育・研究・診療支援

人工知能（AI）の進歩は目覚ましく、私たちの日常生活にも広く浸透してきました。かつては検索エンジンに頼っていた情報収集も、今ではChatGPT、Claude、Gemini、Copilotといった大規模言語モデル（LLM）に気軽に尋ねることができます。アイデア出しや英訳・和訳、データ整理、専門用語の説明まで、LLMに頼らない日はありません。

企業においては多種多様な業種でAIの活用が進んでいますが、医療・ヘルスケア分野においても同様です。医療AIの導入は、単なる技術革新にとどまらず、医療の質の向上や医療従事者の負担軽減、さらには地域医療の持続可能性に直結する課題と捉えられており、本学が果たすべき役割はかつてなく重要になっています。研究の面でも、従来の仮説検証型からデータ駆動型への転換が進んでおり、医学教育のカリキュラムにもAIが積極的に取り入れられています。

こうした背景のもと、北海道大学では医療分野におけるAI教育と研究を一体的に進める取り組みを行っています。その起点となったのが、2020年度に文部科学省の「先進的医療イノベーション人材養成事業」に採択されたことで

した。東北大学、岡山大学とともに医療AI人材育成プロジェクトを立ち上げ、2021年4月には医療AI人材育成プログラム「CLAP（Clinical AI Human Resources Development Program）」がスタートしました。

このプログラムでは、医学研究院を中心に、保健科学、情報科学、薬学など複数の部局が連携し、画像診断、機械学習、ゲノム医療、手術支援といった幅広い分野をカバーするカリキュラムを構築しました。座学に加え、PythonやMATLABを用いたハンズオン演習も実施されており、大学院生のみならず、社会人や他研究科の学生にも広く門戸を開いています。

ほぼ同時期の2021年8月には、北海道大学病院内に「医療AI研究開発センター」が設置されました。ここではAI技術の臨床応用を視野に入れ、基礎から臨床まで多様なAI研究が行われています。たとえば、ディープラーニングによる画像再構成、脳梗塞の自動検出、歩容解析による疾患診断、手術動画解析によるリスク評価など、診療現場に密着したテーマに取り組んでいます。これまで各診療科で個別に進められていたAI研究を統合し、学内の横断的な

連携体制を築くことで、より実践的なAI開発に携われる人材の育成も同時に進めています。この取り組みにより、企業との共同研究も着実に増加しています。

2022年度以降、CLAPの履修者数は急速に増え、2023年には300名を超える規模となりました。こうした拡がりを受けて、学部学生や高校生からも医療AIへの関心が高まり、セミナーや研究発表会、公開講座なども定期的に開催されています。特に今年度からは、全学部の2年次以上を対象とした「医療AI概論」が新たに開講され、より早い段階からAIと医療の関係性を学べる体制が整いました。

また、これまで集中講義形式で実施されていた社会人向けのプログラムは、今年度から「リカレント教育コース」として再編されました。多様な働き方に応じた柔軟な受講が可能となり、継続的な学びを支える体制が整備されています。

そして2024年度には、これまでの教育・研究・診療支援の取り組みを統合・発展させる形で、「ヘルスケアAIXイノベーションセンター（HAIXIC）」が設立されました。AIXとは、AI transformation

（AIによる社会変革）を意味し、本センターでは医療系と情報系の研究者が密に連携し、地域課題の解決と人材育成の両立を目指しています。センター内には、地域の医療課題を把握する「地域連携ユニット」、基礎研究を担う「技術研究ユニット」、現場での実装を推進する「実装開発ユニット」が設けられ、それぞれが緊密に連携してAI技術の社会実装を進めています。

さらに今年度からは、「ヘルスケア半導体研究開発プロモーションユニット」も新設されました。次世代半導体の研究開発を進める株式会社Rapidusが北海道に拠点を構えたことを受け、先端半導体技術と医療の融合に向けた連携も計画されています。

このような一連の活動の背景には、北海道が抱える医療課題の深刻さがあります。広大な僻地、地域ごとに異なる疾病構造、慢性的な医師不足といった問題に対し、北海道大学はAI技術を鍵とする新たな医療体制の構築を進めています。医療AIを活用することで、24時間切れ目のないヘルスケアを提供し、持続可能な地域医療モデルを提示していくことが、本学の使命であると考えています。

北海道大学大学院
医学研究院 画像診断学教室

く どう 工藤
こう すけ 與亮(71期)



ズームアップ③ 北の大地に息吹を! 北大病院が道内初の肺移植実施施設として承認

北海道大学病院呼吸器外科 教授 加藤 達哉(73期)



このたび、北海道大学病院は2025年3月に「肺移植実施施設」として正式に承認され、全国で12番目、北海道初の認定施設となりました。これまで北海道における肺移植医療は、大きな地域格差を抱えていました。肺移植が必要な患者さんは、道内で治療を完結できず、本州の移植施設へ長距離移動を余儀なくされ、待機登録や術前評価、移植手術、さらには術後フォローアップまでの全てを道外の施設で実施する必要があり、患者さんやご家族にとっては大きな身体的・経済的・心理的負担となっていました。

この課題を解決するため、私たちは2013年から肺移植プログラムの準備を進めました。当時、教室は松居喜郎名誉教授の主宰する「循環器・呼吸器外科」として心臓移植プログラム導入を控えており、その過程を学ぶ中で肺移植への道が拓かれました。東北大学の支援を受けて、北海道でドナーが発生した際には、北海道大学がメディカルコンサルタントとして関わる体制を整えました。さらに、教室メンバーはカナダ・トロントや東京大学に留学し、最先端

の移植技術や管理ノウハウを習得し、現在もメンバーの一人が国内移植施設で研修を続けています。

肺移植プログラムの最大の課題は、診療科としての独立でした。過去の事例からも、診療科の独立なしには認定は得られません。北大医学部、大学病院全体の協力と多くの方々の支援のおかげで、教室が独立を実現し、今回の承認に至りました。また、クラウドファンディングを通じて、同窓の先生方から多大なご支援をいただきました。お寄せいただいた厚意は、医療設備や人材育成に活用され、肺移植施設認定に

直結しました。さらに、マニュアルや教育プログラムの整備、院内外への啓発活動にも力を入れ、多職種連携による体制構築を進めました。

今回の承認により、道内の患者さんが住み慣れた地域で高度な移植医療を受けられる環境が整い、患者さんご家族の負担が大きく軽減されることになります。これにより、地域社会に新たな希望の光がもたらされることを願っています。

今後は、日本臓器移植ネットワークを通じて肺移植適応

患者さんの登録が開始され、道内外の患者さんに質の高い移植医療を提供できる体制をさらに充実させていきます。引き続き、皆さまのご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



将来の肺移植手術に備え、日々トレーニングに励む教室員
(Cadaver Surgical Training(CST)にて)



(北海道新聞社から執筆者が許諾を得た上で掲載)

銀

医学科4年 ^{しまもと} 島本 ^{のりみつ} 則光(第104期)



こんにちは。北海道大学医学部歯学部アイスホッケー部(以下HUMD)主将の島本則光と申します。皆様はサムス・有山杯争奪全日本医療系大学アイスホッケー大会をご存知でしょうか。今年度は山梨県の小瀬スポーツ公園アイスアリーナにて2025年3月10日から同月14日にかけて開催された大会です。以前は全医大と呼称されていました。東医体とは異なり、医学部だけではなく歯学部や保健学部、ひいてはスポーツ健康学部等の医療系の学部に属する学生が出場できる非常に門戸の広い大会です。私たちHUMDは本大会を準優勝という結果にて締めくくることができました。その過程について皆様にお伝えしようと思います。

先述した通り本大会は山梨県にて開催されたため、移動時間も含めると五泊六日にもなる非常に長い遠征となりました。宿泊地は温泉街である石和町。

試合での疲れを癒すことができ、HUMDにとって追い風となりました。本大会は8チームの参加であり、A,Bの二つのプールに分かれ、最初の三戦はリーグ戦、その結果により2プールの同順位校同士の結果により順位が決まるという特殊な大会となりました。初戦は札幌医科大学。日頃からよく対戦することのある良いライバルと山梨の地にて相見えることとなり、武者震いを覚えました。結果は5-2と勝利。次の日以降の試合に弾みをつけることができました。二戦目は筑波大学戦。本大会の三ヶ月前に行われた東医体では惜しくも一点差で敗れた相手であり、リベンジに燃えていました。結果は3-5で敗北。第一ピリオドにおける三失点を挽回することができず、非常に悔しい結果となりました。三戦目は順天堂大学戦。勝利すればプール1位、敗北でプール4位となるリーグ戦ならではの珍しい条件のもと、緊張しつつ

も皆が気合に満ち溢れていたのを覚えています。結果は5-2で勝利。プール1位を決めました。中一日空いて決勝の相手は岩手医科大学。相手には経験者の選手が二人おり、彼らになすすべなく2-10にて敗北を屈しました。そして、HUMDは準優勝という結果にてサムス

杯を終えたのです。

本大会の喜びと悔しさを胸に、東医体にて優勝を目指して精進したい所存であります。皆様からの応援が非常に力となります。どうか応援よろしくお願ひします。御拝読ありがとうございます。



紡がれ続ける『フラテ』の歩み

医学科4年 ^{おおさき} 大崎 ^{まりな} 麻里菜(第104期)

平素より、学友会誌『フラテ』に温かいご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

おかげさまで『フラテ』は本年で第111号を迎え、2026年4月には第112号の発刊を予定しております。

コロナ禍の影響により一時中止していた伝統の「各地取材」も、2024年発行の第110号より再開いたしました。第110号では東京へ、第111号では福岡へ取材に伺い、全国でご活躍されている卒業生の姿を誌面を通じてお届けしてまいりました。第112号では神奈川県への取材を予定しており、対面での交流

を通じて得られる臨場感や温かさを、今号でも誌面に反映できればと考えております。

編集部は現在17名体制で、テーマ決定から取材、撮影、編集、校正に至るまで、全ての工程を学生の手で丁寧に行っております。週に一度のミーティングでは、先輩から企画や編集の方法を学び、伝統的な『フラテ』の作り方を代々受け継いでいます。編集代は4年生が務め、細部まで目を配りながら製作にあたっています。

誌面では、教室紹介、新任・退任された先生方へのインタビュー、卒業生

や在学生の寄稿などを通して、「北大医学部の今」を学生の目線でお届けしております。

私たちが足を運び、お話を伺って完成させた記事の数々には、それぞれの現場での熱意や思いが詰まっています。

ぜひ多くの方にお手に取っていただき、ご一読いただければ幸いです。

『フラテ』は同窓会新聞に同封の払込用紙にてご購入いただけます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



フラテ111号発行のお知らせ

医学部フラテ編集部



同窓会新聞をご覧の皆様、いつも学友会誌『フラテ』に温かいご支援を賜り、誠にありがとうございます。今春発刊の『フラテ111号』より、注目記事をご紹介します。

●巻頭特集

「医師の働き方改革について考える」在校生・卒後1～3年の若手医師

への独自アンケートとともに、北大病院副院長・医療安全管理部長として働き方改革に取り組まれてきた南須原康行先生(現・病院長)に特別インタビュー。それぞれの立場で、この大きな変化をどう捉えているのかを探りました。

●OB・OG訪問

「フラテ各地に行くin福岡」

九州でご活躍中の先生方に、学生時代の思い出と現在のご活動について伺いました。同窓生のつながりと先輩のあたたかさを感じられる内容となっており、人生の先輩からの貴重なアドバイスが満載です。

このほか、新任・退任教授の記事や、各教室や部活動の活動紹介など、全260ページにわたり、学生が見た北大医学部

と北大病院の「今」をお届けしています。

また、次号112号の「各地に行く」では神奈川県を訪問予定です。その他記事も鋭意制作中ですので、どうぞご期待下さい。

学友会誌『フラテ』は、同封の払込用紙またはQRコードから、一冊2500円にてお申し込みいただけます。学生の目を通して見る今の北大医学部を、是非ご覧ください。



【申込QR】

バックナンバーあり！
久しぶりのご購入、
ご自身在学习中のフラテも！

※電話でのお申し込みは受け付けておりません。

※すでに111号巻末の用紙で申し込まれた方は今回の申込は不要です。

卒業生寄稿者募集～フラテ茶苑～

学友会誌「フラテ」では、卒業後の先生方からのご寄稿文を掲載する「フラテ茶苑」というコーナーを設けております。期を問わず、ご自身の専門分野、趣味等をご投稿いただけます。在校生にとって、先輩方の多彩な分野でのご活躍は、視野を広げる格好の機会となっております。皆様のご寄稿を心よりお待ちしております。

○内容・形式・字数：自由(専門分野のお話、趣味のお話、最近取り組んでいる事など)

○〆切：2025年11月30日

フラテ編集部

E-mail: frate.med@gmail.com
〒060-8638
札幌市北区北15条西7丁目
北海道大学医学部内

告知板

<教授就任挨拶>



近畿大学
病理診断科
教授

ししど ゆきこ
穴戸 由紀子(68期)

2025年4月1日付で、近畿大学病理診断科教授ならびに病院病理部部長を拝命いたしました。

私は、1992年に北海道大学を卒業後、当時の病理学第二講座（長嶋和郎教授）に大学院生として入局し、JCウイルス

の基礎ウイルス学的研究に従事しました。2004年以降は、北海道大学から杏林大学病理学教室教授に着任された藤岡保範先生のご指導のもと、病理診断学に携わり、現在に至っております。北大の恩師から学んだ「基礎と臨床の

架け橋、病理学」を実践すべく、今後も精進してまいる所存です。
ご指導ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。



東海大学 医学部
内科学系
リウマチ内科学教室
教授

おく けんじ
奥 健志 (77期)

77期(2001年卒)の奥健志と申します。この度、2025年4月より東海大学医学部内科学系リウマチ内科学教授に就任いたしました。1995年に北海道大学へ入学し、卒業後は2021年まで免疫・代謝内

科学教室に在籍し、渥美達也教授、小池隆夫前教授、オルガ・アメンゲアル前講師をはじめ、多くの先生方にご指導いただきました。北大で築いた学びとつながりをこれからの拠り所とし、

現場に根ざした医学と教育・研究を通じて、母校と医学の発展に微力ながら貢献できればと願っております



千葉大学大学院
医学研究院
感染病態学 教授

すずき ただき
鈴木 忠樹 (78期)

2025年4月1日付で、千葉大学大学院医学研究院感染病態学教授を拝命いたしました。2002年に北大を卒業後、分子細胞病理学分野にて学位を取得し、北大成人獣共通感染症リサーチセンター、

国立感染症研究所において、新興感染症の感染病理学研究に従事してまいりました。4月に発足した国立健康危機管理研究機構とのクロスアポイントメントのもと、千葉大学においても感染症

研究を一層推進していく所存です。これまで諸先輩方より賜ったご指導を礎に、今後も一層研鑽を積んでまいります。皆様には引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



旭川医科大学
皮膚科学講座
教授

ふじた やすゆき
藤田 靖幸 (78期)

2025年5月1日付で旭川医科大学皮膚科学講座教授を拝命いたしました。私は2002年北大を卒業後に北大皮膚科学教室へ入局し、先天性皮膚疾患である表皮水疱症や、乾癬を中心に取り組んで

参りました。旭川医大皮膚科は歴史的に北大と縁が深く、北大出身の当講座教授は私で3人目になります。先輩方为目标として臨床・研究・教育にコミットできることを大変光栄に思います。

皮膚科学の発展と北海道の地域医療に少しでも寄与したく決意を新たにしておりますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。



自治医科大学 医学部
生化学講座
機能生化学部門 教授

うおさき ひでき
魚崎 英毅 (80期)

2024年4月1日付けで自治医科大学生化学講座機能生化学部門の教授を拝命いたしました。北大を2004年に卒業後、京大院、アメリカ留学を経て、2016年から本学再生医学研究部にて主にiPS細胞

胞を用いた心疾患研究や心筋症に対する遺伝子治療開発などを進めて参りました。当講座はATP合成酵素研究や栄養学で著名な香川靖雄先生を初代教授とする伝統ある教室であり、地域医療

を支える医師となる学部生教育でも重要な位置を占めています。教育と研究のバランスを取りながら、発展させていきたいと思います。今後とも宜しくお願いいたします。

<学内・院内人事異動>

<採用>

令和7年7月1日 曹 圭龍(80期) 医療・ヘルスサイエンス研究開発機構 特任講師
狩野 皓平(89期) リウマチ・腎臓内科 助教
中村 悠一(89期) 精神医学教室 助教
10月1日 副島 崇旨(90期) 麻酔科 助教

<昇任>

令和7年7月1日 河野 通仁(82期) 免疫・代謝内科学教室 准教授(病院講師)
甲谷 太郎(89期) 循環器内科 講師(同科助教)
多田 篤司(89期) 循環器内科 講師(同科助教)

<北大医学部43期2025年同期会>

日時：2025年9月6日（土）17時30分
場所：ホテルニューオータニイン札幌 札幌市中央区北2条西1丁目
会費：12,000円
出欠：7月31日、同伴のパートナーの名称

<北大医学部56期会 総会・同期のつどい>

北海道大学医学部56期会 総会・同期のつどいを開催します。
日時：2025年11月2日（日） 16：00～
場所：北海道大学医学部百年記念館

北海道医学会からお知らせ

○北海道医学会について

北海道医学会は北海道における医学と医療の進展を図るため、大正12年に発足した学術団体です。現在は、北海道大学、札幌医科大学、旭川医科大学の医師、医学研究者のほか本会の目的に賛同される方々を一般会員として、また道内の主要医療機関には特別会員として、本会に功績のあった方々には名誉会員としてご参加いただいています。

○主な活動内容

- ・機関誌「北海道医学雑誌」の発行（5月、11月：令和7年は第100巻）
- ・学術集会「市民公開シンポジウム」の開催（10月下旬：昭和42年から実施）
- ・若手研究者への「研究奨励賞」の授与（年3名以内に賞状及び副賞：昭和58年から実施）
- ※ 北海道医学雑誌は大正12年8月の創刊以来、戦中、戦後の一時期を除い

て今日に至るまで継続して刊行され、北海道における医学総合雑誌として広く認知されています。

本誌は原著論文以外にも、「研究会」「教室だより」などのセクションにおいて会員の様々な活動を紹介しています。

○入会のご案内

本会に入会されていない同窓会員におかれましては、是非ご入会いただきますようご案内申し上げます。医療機関としてのご入会も歓迎します。
なお、会員には機関誌「北海道医学雑誌」を発行の都度お届けいたします。
入会方法は、北海道医学会事務局にお問い合わせください。

○お問い合わせ先

北海道医学会事務局
電話：011-706-5007
E-mail：digakkai@med.hokudai.ac.jp

ドクター総合補償制度のご案内

同窓会では「ドクター総合補償制度」を創設し、現在、500名以上の会員が加入して、ご好評をいただいています。
本制度には「医師賠償責任保険（勤務医向け）」、「医療・がん保険」、「所得補償保険」があり、団体割引が適用されるので割安な保険料で加入することができます。
年度途中でも加入出来ますので、取扱代理店または同窓会事務局にお問い合わせください。

〈取扱代理店〉
株式会社第一成和事務所
〒103-8214 東京都中央区日本橋馬喰町1丁目12番3号
Daiwa日本橋
馬喰町ビル3階
フリーダイヤル：0120-100-492
E-mail：
koumu@d-seiwa.co.jp
〈同窓会事務局〉
電話：011-706-5007
E-mail：furate@med.hokudai.ac.jp



新刊書紹介



「胃の病気とピロリ菌」

あさ か まさひろ
浅香 正博(48期)
中公eブックス ¥990

医学の進歩が、静かに社会を変えていくことがある。

本書「胃の病気とピロリ菌ー胃がんを防ぐためにー」は、まさにそのような変化を丁寧に記録し、わかりやすく伝えてくれる一冊だ。

15年前に出版され、多くの読者に支持されてきた本書が、時を経て電子書籍として再刊された。ピロリ菌に関する最新の知識や研究成果が加筆され、長く読み継がれてきた価値はそのままに、今の時代にも生きる一冊となっている。

ピロリ菌と胃の疾患との関係、そして除菌の大切さについて、著者の浅香先生は、長年にわたり研究と臨床の現場から真摯に向き合ってきた。その功績は世界にも広く知られている。

浅香先生は、卓越した研究成果を得ることにとどまらず、それを社会に伝え、政策へと結びつけることに努力を惜しまない。ピロリ菌除菌と胃がん発生率との関係を証明した研究や、保険適用の実現

に向けたくどりは臨場感にあふれ、読む人を飽きさせない。本書は、浅香先生のこれまでの歩みの集大成であり、「医学が社会を動かした」ことを示す記録としても価値が高い。

私は2000年、厚生労働省で潰瘍患者へのピロリ菌除菌治療の保険適用に関わる業務を担当していた。当時北大の教授であった浅香先生は関係学会の代表としてガイドラインをとりまとめ、厚労省にも幾度となく足を運んで下さった。いつもあたたかな笑顔で、科学的根拠に基づいた意見や現場の声をバランスよく伝えて下さる、その姿勢に私は強く感銘を受けた。2013年には除菌治療の対象が胃炎患者にまで拡大され、その際も先生は中心

的な役割を果たされた。

ピロリ菌除菌の普及によって、我が国では胃がん死亡者数と罹患者数のいずれもが減少し、世界ではじめて胃がんを減少させることに成功した。それでもなお、正しい情報が行き届いていない現実がある。だからこそ、本書の果たす役割は今も大きい。

医療関係者にとっては理解を深める一助となり、一般の読者にとっては、自身や家族の健康を見直すきっかけを与えてくれるだろう。

静かで誠実な言葉に導かれながら、確かな知識を自分のものにできる一冊である。

(会員2 古元重和)



「川浪 進 水彩画集」

かわなみ すすむ
川浪 進(43期)
みずのわ出版 ¥5,000

京都在住の川浪君は10年くらい前、本学の後輩に医院を預け医業を離れた。以後、絵画・囲碁・ギリシャ哲学、音楽はピアノ・チェロ・フルート・コーラス、運動はテニスや登山など八面六臂の活動に没頭。中でも幼少のころから親しんできた絵画では、公募展での入賞や個展・画集の出版など、たゆまぬ研鑽の結果が残された。

画材の対象は静物、人物、風景と広がったが、“コク”のある油彩が水彩に変わったのはなぜか。スケッチは一期

一会の「生を写す」(写生)瞬間との思いが増し、「内なる世界の軽やかな営みで喜び極まりない遊び」(画集あとがき)の心が燃え上がったからだろう。彼の速筆は、処刑のため城の塔から落とされる囚人の1〜2秒間の姿をスケッチしたというゴヤに匹敵するが、速さだけでなくタッチは強く、的確な構図の中に静と動があり、豊かな色彩は透明感が漂っている・・・、一気呵成に描かれた筆達者のスケッチはすでに完成品なのだ。

今回の画集の作品群は、背景の「景」(在るもの)に「風」(心)が描き込まれた「風景画」が多い。ラテン語のspiritus (風、息吹の意) から「心、魂」を意味する英語のspiritが生まれたように、「風は心」と云えようか。

本年2月、体調不良を顧みずスケッチのため豪雪の彦根城や古い家並みの長浜へ、息を切らし寒さに震えても、彼にとって画を描くことは「生きること」なのだ。

(43期 井上勝六)

次号に新刊書紹介をご希望の方は、右記の要領でお送りくださいますよう、お願いいたします。

【原稿締切日】 2025年10月17日(金)までにお送りください。

【字 数】 本文600字以内でお願いいたします。※本文の前に「タイトル」、著者名(または編集者・監修者名等)フリガナ(卒業期)、出版社名、金額(税込)を、本文の最後に執筆者名および卒業期を明記してください。

【表 紙】 表紙の画像をメールに添付してお送りください。

【書評執筆者】 著者(編集者・訳者・監修者)以外の同窓会員(会員2も含む)に限ります。

【原稿送付先】 furate@med.hokudai.ac.jp

【掲 載 号】 新聞183号(1月号、1月上旬頃発送開始予定)

会員名簿・同窓会誌の処分にお困りの方へ

個人情報に掲載されておりますので、ご不要になりましたら適切な処分をお願いいたします。処分が困難な方は、同窓会事務局にお送りください。
なお、恐縮ですが送料は各自でご負担願います。

○送付先
〒060-8638 札幌市北区北15条西7丁目
北大医学部百年記念館内
北海道大学医学部同窓会事務局
【冊数が多い場合】 日時指定の上、必ず「百年記念館」に直接配達されるよう指示してください。
※月曜日～金曜日(祝日、年末年始を除く)：10時～16時まで

百年記念館の利用について

お問い合わせ先

北海道大学医学系事務部総務課庶務担当
TEL: 011-706-5004 FAX: 011-717-5286
E-mail: shomu@med.hokudai.ac.jp
【受付時間】月曜日～金曜日(年末年始・祝日を除く)午前10時15分から午後5時まで

※同窓会事務局では予約および予約状況の確認は出来ません。

一面の写真説明

プラタナスの木漏れ日

蝦名 康彦(66期)

保健科学研究院の玄関前には、大きな2本のプラタナス(和名：すずかけ)の樹があります。古代ギリシアの医者ヒポクラテスは、プラタナスの木陰で弟子たちに医学を説いたそうです。大きな広い葉をもつプラタナスは、ギリ

シア語で「広い」を意味するplatys(プラテュス)に、その名が由来するとされています。保健科学研究院が幅広い分野の専門家の集まりであることから、このプラタナスの語源になぞらえて広報誌を「プラテュス」と命名しました。(保健科学研究院広報誌第5号 2010年9月より)さて、現在では巨木となった2本の樹は、かわらずに研究院玄関前で気持ちの良い木陰を作っています。

編集後記

第182号を無事に皆様のお手元にお届けすることができました。ご寄稿いただいた先生方、編集委員の皆様、同窓会事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。7月初旬にもかかわらず連日の猛暑日が続いており、「以前はこんなに暑くなかった」と外来で話していたと

ころ、カルテには昨年まったく同じことを書いていたと気づきました。常態化した異常気象と、自らの話題の乏しさを少し憂える今日この頃です。厳しい気候が続きますが、同窓の皆様におかれましては、どうぞご自愛ください。

(83期 白井慎一)

同窓会費納入のお願い

同窓会事業は会員の皆様から納入された会費によって運営されています。会費納入にご理解とご協力を切にお願い申し上げます。

ご逝去者

新聞181号発行以降、ご連絡いただいた方を掲載しております。

御逝去年月日	氏 名	期	御逝去年月日	氏 名	期
2021年			3月26日	中 森 伸	37
3月15日	藤 野 雅 子	65	4月24日	外 岡 立 人 郎	45
2024年			5月 4日	松 田 一 孝	33
7月21日	阿 部 憲 司	48	5月 4日	島 崎 孝 志	48
8月22日	飯 塚 弘 志	37	5月 9日	油 屋 潤	64
9月20日	波江野 力	59	5月11日	越前谷 達 紀	42
12月17日	小 室 勝 利	44	5月22日	廣 重 力	31
2025年			5月29日	前 田 幸 昱	35
1月 4日	中 島 猛 行	52	6月 4日	大 鹿 徳 成	36
1月24日	石 塚 世志人	専7旧	6月11日	齋 藤 子	35
2月 3日	森 山 龍太郎	36	6月12日	武 田 武 夫	34
2月 8日	田 辺 福 徳	29	6月27日	河 合 忠 忠	31
3月13日	田 島 邦 好	35	6月28日	菊 地 芳 彦	43
3月24日	徳 富 義 明	44	8月 2日	青 柳 俊	43